

MUSASHINO Vol.89 *for* TOMORROW

巻頭

私を支え続ける嘲笑の声

畑中良輔

海外音楽事情

音楽の何でも屋、

コレペティータ

三ツ石潤司

卒業生インタビュー

コンテストも楽しめれば

千田悦子



武蔵野音楽学園 創立八十周年

April 2009
vol.89



▲ 武蔵野音楽学園入間キャンパスの春

創立 80 周年を迎えて

武蔵野音楽大学は、本年創立80周年の記念すべき節目を迎えました。

昭和4年、武蔵野音楽学校として発足した本学は、昭和から平成への激動の時代を乗り越え、大きく発展することができました。その歴史には、創立者福井直秋の西洋音楽に対する情熱とビジョン、それを支えた人たちの苦労と無私の協力が刻み込まれています。

福井直秋にあえて学校設立を決意させたものは、自らがその美に触れ感動した西洋音楽の正しい理解と普及促進であり、また真摯な研鑽を通して芸術の深奥を求めると同時に、豊かな人格の育成を旨とする理想の音楽教育の実現でありました。

この強い決意に共鳴した教職員、生徒をはじめ多くの協力者の学校設立への情熱の発露を創立者は「和」の心と呼び、これを建学の精神と定め、さらに、教育の方針として「音楽芸術の研鑽」並びに「人間形成」とを掲げました。この理念が、本学の教育研究のゆるぎない礎となって、今日までひき継がれています。

いみじくも本年は、我が国とハンガリー共和国との国交回復50周年にもあ



武蔵野音楽大学学長
同附属高等学校校長 **福井 直敬**

たり、同国政府の支援を受けるリスト音楽院の提案により、同音楽院と本学の交歓演奏会が実現の運びとなりましたことは、本学の長年にわたる国際交流とその実績が実を結んだものと自負しているところであります。

さて、創立80周年を記念する諸行事は、すでに附属音楽教室の子供オペラ「ふしぎな魔法の笛」を皮切りにスタートをしていますが、諸々の企画は、一時的なことに留まらず、将来にわたる本学の教育研究の向上と我が国の文化芸術の振興に寄与するものでなければなりません。

本学では、記念行事の実施と併せて、大学院修士課程にヴァルトゥオーソコースおよび音楽環境運営専攻の設置を予定し、大学別科開設などを検討して、教育組織の強化・拡充を図ります。さらに、教育職員免許法に定められた「教員免許状更新講習」の実施、各専門部会ごとに行っているFD(教員の教育力向上のための組織的取組み)の検証と改善、職員研修の充実、奨学金の拡充、コンサートオルガンのオーバーホール等施設設備の改善に一層力強く取り組んで、本年を意義ある飛躍の年にしたいと考えております。

関係各位の一層のご支援、ご鞭撻を衷心よりお願い申し上げます。

私を支え続ける嘲笑の声

● 畑中良輔 ● 東京藝術大学名誉教授 ●

東京藝術大学名誉教授の畑中良輔先生は、1922年生まれで現在87歳。歌手として、指導者として、音楽評論家として、エッセイストとして、その歩んでこられた道のりはまさに日本の音楽史そのもの。ところが、先生が音楽の道に進もうと思ったきっかけも、音楽の世界で頑張りつづける支えとなったのも、実に意外なものでした。さて、その意外なものとは!?

数学のない学校＝ 音楽学校

人前で歌った事もない。ピアノも弾いたことがない。中学校1、2年の音楽の成績も上位とは言い兼ねる。

こんな状態で、旧制中学校4年の秋、上級志望校を一応出すように、と言われて、ハタと困った。私は小学校の時から算術が全くダメで、中学受験について、担任の先生から「お宅の良輔さんは、県立を受けても到底無理です。市立の商業でも受けられてはどうですか」と両親が学校に呼ばれて忠告を受けたくらいである。小学校の時から、出来ない生徒は放課後、補習授業があり、家に帰ると夜7時には家庭教師がやって来て、9時迄受験勉強である。理数系の学科は全く興味がなく、家庭教師の先生も、今考えたら、ずいぶんやりにくい生徒だったろう。

とにかく、中学時代の数学の試験も惨憺たるもので、試験はいつも名前だけ書いて、ベルが鳴ると真先に白紙答案をさっさと出していた。

当時、理数系の学科がまったくできなかつた私だが、運よくそれでも県立の中学校にもぐり込めた。

さて、どこかの大学を探さねばならない。数学のない学校を片っぱしから探した。丹念に一校一校受験教科を見ていたが、あった、あった。《音楽学校》である。

中学での音楽の時間はまあ可もなし不可もなしの点だったが、私の母が邦楽の系統で、琴、三絃の師匠もやっていたので、邦楽とはいえ、音楽は嫌いではなかつた。母がお弟子に稽古をつけている時、よくうしろに坐っていわゆる「お稽古」を聴くのは好きだった。おかげで、小学校3年の時、敬老会で琴を弾くようにと言われ、あわてて母親に稽古して貰った事はある。



畑中良輔 Ryosuke Hatanaka

東京音楽学校（現東京藝術大学）卒業。二期会創設者の一人。オペラでは名歌手フェルッチョ・タリアビーニ、ゲルハルト・ヒッシュラと共演。歌曲ではドイツ・日本歌曲に造詣が深く、「畑中良輔歌曲集」を出版。新国立劇場初代芸術監督。2000年文化功労者、'06年恩賜賞・日本藝術院賞受賞。近著「オペラ歌手誕生物語」は「日本エッセイストクラブ賞」を受賞した。'08年日本藝術院会員。



▲ 入間キャンパス

私を支え続ける 嘲笑の声

Ryosuke Hatanaka

とにかくいろんな音楽学校(その頃は専門学校だった)を片っぱしから書いてクラス担任に提出した。

翌日、昼休みに職員室に来い、との連絡が来た。恐る恐る職員室の戸を開けて担当教官を探した。担任教官は数学の専門教師である。

「君イ。志望校に音楽学校がいろいろ書かれてあるが、第一ピアノが弾けるのか？」

「いえ、弾いた事ありませんが」

「じゃ、歌はうたえるのかね。君が学芸会で歌ったという話も聞いてらんな」

「……」

「譜面は読めるんかね」

「……」

「ピアノも弾けん、歌もうたえんで、音楽学校受けるちゅうんか」

次第に先生たちに囲まれて、私は慄えていた。

「君が音楽学校受験？ は、は、は、は、止め給え。受かるわけではないし、今からやっても受けるレベルにすぐ到達するわけではない。無謀にも程がある。止め給え、は、は、は、止め給え」

まわりの先生もこの教頭先生の笑い声につられて、職員室は私への嘲笑の渦となった。先生方の嘲笑を一身に浴びて、私は心の底から、怒りが湧き上がるのを感じ、唇を噛んだ。

この教頭先生の「は、は、は、止め給え、止め給え」の声がその日から私の頭の中で常に鳴りひびいた。

「ようし、そんならやってみようじゃないか。あの笑い声に応じてやろう」

やった事もない《音楽》を、こうなったら意地でもモノにしてみせるぞ、と自分に言いかけた。

バイエルと コールユーブンゲン

親父は、私を一般の大学に行かせ、何とか卒業したら一介のサラリーマンになってくれればよいと考えていたらしい。音楽といっても邦楽なら何とか母

親のツテもあったらいいの、皆目見当もつかない。中学の音楽は、1、2年で終りだが、週に2日来校する武蔵野音楽学校出たての若い神代正之先生のところへ、「何をどのように勉強したら良いのですか」と放課後相談に行った。

「へえ、音楽学校志望だって？ この学校に音楽志望の生徒がいたのか」

先生もびっくりしたようで、北九州の港町、とても音楽的雰囲気など全くないところでの突然変異である。神代先生は博多の方の中学も持っていて、この門司中学も、授業がすむとさっさと博多のほうへ帰ってしまう。

「まア、時間のある時、基礎位は見えてあげるけど、家にピアノあるの？」

「いえ、姉がオルガンを時々弾いています」

「そう、じゃ『バイエル教則本』と『コールユーブンゲン』を買って、初めの方をみていなさい。次の週、みてあげるから」

ということで、門司にたった一軒の楽器店にその日私はこわごわ行く事にした。

「あのう、ピアノ教則本のバイエル、ありますか」

「バイエルならいろんなのがあるけ



▲ 入間キャンパス



れど、どれにする？」

「さァ、どれも同じ内容ですか？ どれにすればいいのでしょうか」

「坊ちゃん、初めて？ そうだねえ、これでいいと思うけど」と、一冊手渡された。貫名美名彦編と書いてある。

「それとコーユールブンゲンを」

「えっ？ 坊ちゃん、コーユールじゃなくて、コールユールブンゲンだよ」

森楽器店の小父さんはやさしく私に微笑した。それにたづねられて、私も笑って気がラクになった。信時潔・三木楽器店の表紙である。

何年か先に、音楽学校で、ピアノのレッスン教官が貫名美名彦教授、また信時潔の大作、カンタータ「海道東征」を歌うことになるうとは、この時点では全く何も見えて来ない。

バイエルとコールユールブンゲンを買って、少しは譜面の読める姉に教わって、神代先生のところへ行ったが、ピアノ科出身の先生はいろいろな人の伴奏を引受けていて、とても、初歩も初歩の私に構ってはもらえなかった。間もなくして、神代先生の代りにやはり武蔵野出たての若い新城正一先生が赴任して来た。神代先生より時間があつたようで、バイエルも少し進み、コールユールブンゲンも五度音程位いったところで、新城先生が応募した「愛馬

進軍歌」が一等当選となって、大騒ぎとなった。連日大本営の人たちや東京のジャーナリストたちに囲まれて、新進新城正一先生は《時の人》となり、学校の授業はいつも自習となった。私のレッスンも、やっと軌道に乗りかけたのに、すべて停止してしまった。



東京音楽学校は唯一の官立音楽学校で、到底受験は無理だろうと新城先生から言われたが、5年生になってからは、自分で勉強する以外に頼る人ではなく、「ソナチネ・アルバム」第1巻より任意の1曲、というので一番やさしい第7番をえらび、歌は好きな「ジョスランの子守唄」というのを日本語で勝手にえらんで受験することにした。琴の師匠をしていた私の生母は早く亡くなり、そのあと、何と梅光女学院で数学の教師をしていた奈良女高師切つての秀才という数学の先生が新しい母となった。よりにもよって私の新しい母が数学の先生とは！

当然、新しい母は音楽よりも一般の男の子たちの進む方向へ私を向けるべく、学校側と話し合っていたが、本

人の私が一向にその気がなく、家の中にはいつも冷たい空気が流れていた。

そんな時、くじけようとする私の耳にひびくのは、あの教頭の「は、は、は、止め給え、止め給え、音楽学校を受験だなんて」

のあの笑い声である。そのたびに私は「負けるもんか」とその怒りのエネルギーを音楽にぶつけていた。

旧制中学5年卒業式にも出ず、すぐ東京の先生に紹介状を貰って故郷をあとにしたのが昭和14年の2月だった。

紹介状を貰った沢崎定之先生のお宅へ、指定された日に伺った。その日は音校受験生のレッスンの日だった。おそろおそろ片隅に腰をおろし、先生のレッスンを拝聴。おどろいた。イタリア語のアリアやドイツ語の歌、もうびっくりするような声の人ばかりである。やっと私の番が来て、「コールユールブンゲンを最初にやってみますか、このところをやってみて下さい」と七度音程のところを示された。

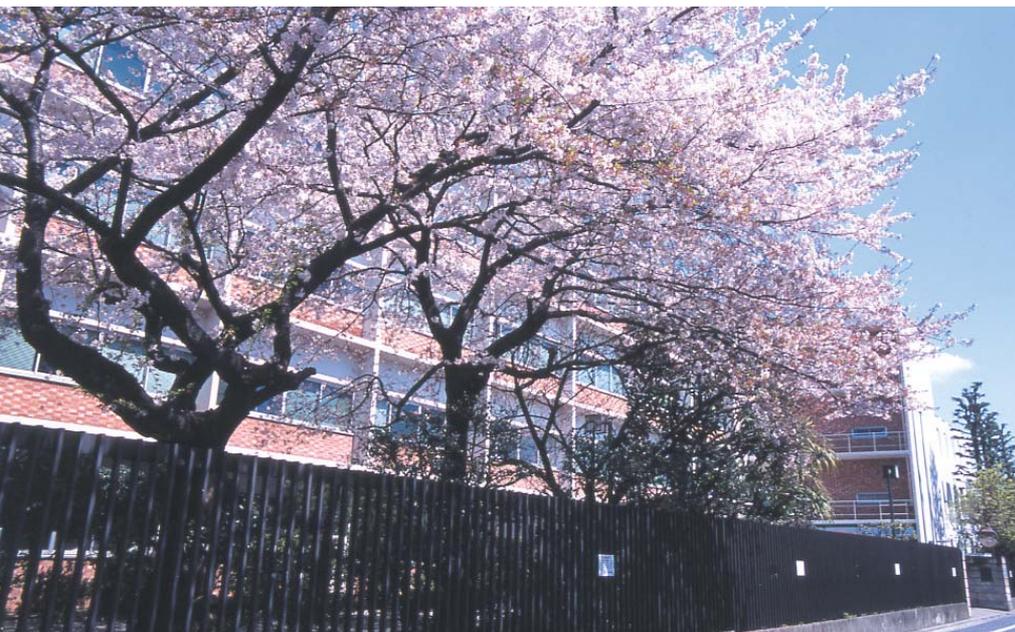
「あのう、そこはまだやってないのですが」

「ええっ、君、今年受験するのでしょうか。まだやっていない？ 声楽の自由曲は何を歌うつもりなのかな？」

「はあ、ジョスランの子守唄です」



▲ 江古田キャンパス



▲ 江古田キャンパス

「試験もそうだが、君、音楽を馬鹿にしてはいけません」

来年を目指して私の猛勉強は始まった。歌にピアノに、死に物狂いだった。借りたピアノで1日8時間以上はピアノ、あとは発声、ソルフェージュ。1年という親との約束での受験勉強だった。そんな時、私の耳に鳴ってくるのはあの、「止め給え、止め給え、は、は、は」の声だった。あの嘲りの声が、今や私を支える力となったのだ。何の才能もない私が、あの嘲笑のおかげで、「意地でも音楽をやる!」という力の原動力となったのである。それは今87歳の今の私の耳の中でも鳴りひびいている。

「ほう、フランス語で?」

「いえ、日本語で」

部屋にいた他の受験生から笑い声が洩れた。おどおどした田舎の中学生が、コールユーブンゲンも全部やってなくて音校受験とはとんでもないお笑い草だったろう。

「君、3月の受験にはとても駄目です。今年は受験は止めて、来年になさい。この1年で何とか間に合わせなくては」

「あの、折角来たのですから受けるだけで」



▲ レッスン風景 (附属高等学校)

私を支え続ける 嘲笑の声

Ryosuke Hatanaka

・音・楽・余・話・ 大演奏家も「あがる」!?

ステージでの緊張は、いかなる演奏家にも付きまとう難題である。

かつて大ピアニスト、ギレリスがベートーヴェンのピアノ協奏曲全5曲を連続演奏した時の事。私が事情あって演奏前の楽屋を訪ねると、楽屋全体に吉草根(鎮静効果があると言われる薬草)の匂いが充満しており、その日彼の演奏は、日ごろ完全無比な演奏をする彼にしては珍しくミスが多かった。彼が喫煙し始めたのは、この時期だったらしい。

また、かのミケランジェリが、フランスにおけるリヒテル主催の音楽祭に招かれた時のこと。最前列には彼を招聘したりヒテル本人が座っているという

状況下、顔面蒼白でステージに登場したミケランジェリは最初の曲目、ドビュッシーの「版画」第一曲「塔」の冒頭、緊張を解いて確実に鍵盤をつかむためであろうか、ピアノリッシュモで書かれた第1音を驚くほど強い音で弾き、その後、即座に音量を落として見事な演奏へとつなげたのである。

さらに、私はモスクワでの学生時代、恩師ネイガウスの演奏会を欠かさず聴いた。彼はステージでピアノの前に座ってから、カフスや襟をなおす、椅子を調整する、時にはピアノの位置や照明の角度を変えさせるなど、毎回あれこれと時間をかけるのがお決まりとなって

いた。その間、この「儀式」に慣れ親しんだ聴衆は、忍耐強く待つのであった。おそらく彼は自分自身を日常から切り離して演奏にふさわしい気分へと導くために、こういった手はずを必要としたのであろう。

偉大な演奏家は、すでに確立した名声を維持して聴衆の期待に応えるという、常人には想像しがたい重圧を背負っている。しかし、その重圧は、緊張と同時に、生きた演奏に不可欠な感情の高揚をも、もたらしているように思われる。

(訳: 重松万里子)
コンスタンティン・ガネフ
(本学客員教授)

海・外・音・楽・事・情

音楽の何でも屋、コレペティートア

●三ッ石潤司(武蔵野音楽大学教授、声楽・コレペティートア)●

昨年10月から、武蔵野音楽大学に着任した教授の三ッ石先生は、昨年7月まで約20年間でウィーンをはじめヨーロッパで活躍してきたコレペティートア。コレペティートアとはどんな仕事なのか、最近まで教えていたウィーン国立音楽大学のことなどを伺いました。



▲ウィーン音大でのレッスン風景

K o r r e p e t i t o r
コレペティートアにはさまざまなジャンルがあるそうですが、どんなお仕事なんですか。

コレペティートアとは端的には、歌手にピアノで稽古をつける人、音楽稽古を一緒にする人、と言えましょうか。劇場の中で音楽稽古一般、オーケストラの代わりに伴奏をして、歌手がパートを覚え込んだり、音楽的に仕上げるのを手伝う仕事です。オペラでは、ピアノ1台で衣装をつけて全幕通しての稽古をすることもあります。

ピアノはフレキシブルな楽器ですから、劇場ではまず最初にこれで練習をしていき、歌手それぞれが自分のパートを覚えるのを助けたり音楽的な手直しをしていきます。またレパートリーを教える先生でもあります。ドイツ語圏の一般の音楽大学ですと、歌手に限らずフルートやヴァイオリンなどの奏者も、自分の知らない曲を覚えるためにコレペ

ティートアがおり、各楽器の先生のアシスタントのような形で、レパートリーを教え込むこともやります。日本で言えば伴奏助手のような人がもう一歩進んで、曲を教えたり、テンポを直してあげたり音楽指導をするようになった人、とも言えるでしょう。

劇場においてはオペラを上演する場合、演出家や指揮者によって同じ作品でも音楽作りそのものも変わってきますから、最初の企画、プラン、コンセプトづくりの段階からコレペティートアが参加し、話し合いながら概要をつかみ、その上で歌手たちと稽古をしていきます。オペラ指導の場合、3週間から1ヵ月くらい稽古を重ねますが、大劇場で上演する古典的な演目ですと、出演者も経験豊富で応用がきく人たちですから、もっと短くて済みます。かつてはコレペティートアの仕事は、指揮者、作曲家がやっていたのですが、分業化が進み、音楽監督直属の音楽スタッフに変わってきたようです。ヨーロッパの劇場の伝統では、副指揮者、指揮者、常任指揮者、そして監督へ進む道筋の最初のスタートがコレペティートアである、とも言えるでしょう。

K o r r e p e t i t o r
先生は大学時代は作曲を学ばれておりましたが、コレペティートアに進まれたのはどうしてでしょう。

ピアノで歌の伴奏をすることが好きだったし、ソロよりもアンサンブルが好きだったことが基本にあったと思います。特に難しい技巧をマスターしてコンクールに出場、ソロピアニストになる、という人たちも当然いますしそれは一つの行き方ですが、学生時代にそい



三ッ石潤司 Junji Mitsuishi

1957年生まれ。兵庫県出身。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業後、同大学大学院で音楽学(ソルフェージュ)を専攻、'84年修士課程修了、同年同大学院博士課程に進む。アンリエット・ピュイグ＝ロジェ氏にスコアリーディング、伴奏法、コレペティツィオン、室内楽を学ぶ。'88年、ウィーン国立音楽大学ピアノ声楽伴奏科、コレペティツィオン科、音楽理論科に入学。'89年から同大学講師を務め、'90年から'91年までウィーン国立歌劇場オペラ研修所でソロ・コレペティートアを務める。

オペラコミック座、エスプラナードオペラ(サンティエンヌ)、シャトレ座などで、シェフドゥシャン(コレペティートア)を務めた。'06年は、ウィーン国立音大と並行して国立ヴェルツブルク音楽大学(ドイツ)声楽科、オペラ科の講師も務めた。ヨーロッパ、南米の諸都市で、声楽、器楽伴奏者、コレペティートア、作曲家として、多くのリサイタル、放送、録音、音楽指導をする。'08年10月より武蔵野音楽大学教授。



▲2003年、サンティエンヌのエスプラナードオペラでコレペティートアとして招かれる



▲1998年パリオペラコミック座でコレペティートアを務めた

う一般的な考え方にとらわれて、ピアノの技術について劣等感ばかり持っていた私の殻を打ち破ってくださったのが恩師、アンリエット・ピュイグ＝ロジェ先生でした。

先生はメシアンからピアノ曲を捧げられたほどの人ですが、彼女は、アンサンブル演奏やコレペティートアについては、いわゆる「仕事」、「職業」ではなく、天から与えられた「天職」だったとおっしゃっていました。そのロジェ先生が、あなたはコレペティートアに向いている、日本にいるより、劇場の伝統のあるヨーロッパへ行った方が良い、と勧めてくださり、ウィーンに行き、知らず知らずのうちにコレペティートアになったのです。渡欧は1988年のことでした。ウィーン国立音楽大学ピアノ声楽伴奏科、コレペティツィオン科、音楽理論科に入学し、半年後の'89年3月から同大学の講師を務めていました。

コレペティートアには作曲をされる方が多いのです。ロジェ先生のように、音楽全体あらゆるジャンルを学ばれて、なんでも知っている、という方が向いています。つきつめて一つの道、ということも大切ですが、音楽を専門にこだわらずに広くとらえるのではなく、一つの

総合的な文化と考えたほうが良いのではないのでしょうか。18才から22才くらいまでの間に何をやってきたか、で一生が決まるとは思えません。大学を出て、初めて自分の専門、仕事＝天職を意識し始めるというのは、音楽家としては当たり前前の姿だと思います。特にコレペティートアは経験が全てで、私も教えている間に適性ができてきたと思います。

K o r r e p e t i t o r
コレペティートアに求められる能力、あるいは勉強すべきことはなんでしょう。

コレペティートアは、自分が拍手を浴びる仕事ではありません。あくまでも縁の下の力持ち。人を助けることが好きでないとできません。他の人とアンサンブルをすることに喜びを感じるかどうか、が大切です。よくピアニストが伴奏する場合とどう違うかと聞かれますが、コレペティートアはただ伴奏をつければ良いわけではありません。例えば歌手や他の楽器でもそうですが、アンサンブルの同等のパートナーとして、相手と共に音楽をつくっていく。そのことがこれからの独奏、独唱、あるいは室内楽にとって大変重要な要素になってくると思います。

そのためにも、伴奏者、コレペティートアが音楽全体、文化としての総合的な音楽に対する理解を持っていることが重要なのです。

また難易度の高い曲を弾ける、初見ですぐに弾けるなどの能力も求められますが、同時にオペラの歌い出しのキッカケを歌ってみせるとか、一種のカウンセラーとして声の判断ができる、など様々な能力が求められます。多様な勉強をしないといけないし、それを習う、ということもできないのです。

とりわけ大事なのは語学能力です。言葉といっても話せる、というだけでなく、歌う時の言葉が求められますから、単に言葉の先生だけにとどまってはいけないわけです。歌としての各国語に対する感覚が求められます。

最近では日本でもコレペティートアの立場からみて欲しい、という歌手の方も増えました。ヨーロッパでやってこられた方には、コンサートやオペラの準備としてコレペティートアがいるのが普通ですから、当然そうなると思います。劇場では、普通オーケストラや合唱と同様、常駐のコレペティートアが必要なのですが、日本にはそういうオペラ劇場がまだありませんから、職種としてはこれから、といったところでしょうか。

K o r r e p e t i t o r
ウィーン国立音楽大学で、コレペティートアはどんな授業をされるのですか。

ウィーンでは1ユニットが45分間の授業ですが、週20ユニット担当していました。その内10ユニットは、声楽の先生のアシスタントとしてピアノを弾きます。そして後の10ユニットは、声楽を勉強する全ての学生が、それぞれの勉強と問題解決のために私たちコレペティートアの授業を使います。声楽科だけで15～6名のコレペティートアがいますが、学生たちが必要とする全て、例えばこの曲を自分が歌えるか、自分の声がか

の曲に合っているか、あるいはプログラムの相談など、セラピスト、コンサルタントのような役も仕事になります。発声については、具体的に指導するということは当然ありませんが、発声上の問題を感じたときには、声楽の先生に相談を勧めたりもします。

ウィーン国立音楽大学には、声楽だけでなく、管・弦・打楽器すべてにコレペティータアがいますし、またオペラプロジェクト専門のコレペティータアもいます。

ウィーンの学生と武蔵野音大の学生の違い、それは西洋と日本の違いがそのまま出ていると思います。ウィーンではそれこそ世界中から集まった生徒を相手にしていましたが、皆自己主張の強い人たちばかりです。基本的には自分のやりたいことがはっきりしている、ということでしょう。

授業に来る時も、「今日はこれとこれをやりたい、これをやりたいから教えてくれないか」と言ってきます。モチベーションがあるので、教える方もやり易いと言えます。西洋は自己主張することをよとする文化ですし、西洋音楽はそこから生まれてきたわけで、逆に自己主張をしないとやっていけない世界です。

まだそれほど多くの学生さんたちと向き合った訳ではないですが、武蔵野

の学生はそれと反対に大変謙虚に感じます。育ちが良い、というか大変真面目ですが、待ちの姿勢が強いような気がします。「今日は何をすればいいですか」という態度が多いですが、もっと積極的でもいいのではないのでしょうか。ただ、どちらが良いとは一概には言えません。それぞれの文化の違いですし、社会は自己と自己のぶつかり合いであると共に、その周りを包む緩衝材のようなものがないと成り立たないものです。私見ですが、アジアの文化の方が社会性という意味では成熟している、とさえ思います。

私は自分の授業で、「こうですよ」と教えるのではなく、「なぜこうなるべきか」という部分を説明したいと思っています。また学生からの質問の中に、「こう思い、こうしたいのだが、そうならない」という部分があれば、もうその問題は半分は自分で解決できているのです。そういう質問ができることが勉強の根本でしょう。

K o r r e p e t i t o r 三ッ石先生の音楽の原点はなんでしよう。

学生時代、ロジェ先生のレッスンを受けている時、私が弾き先生と一緒に歌ってくださっていたのですが、あるオペラの終幕がとても悲しい内容だと、先

生は泣きだしてしまわれたのです。その時、先生はもう80才ぐらいだったのですが、その若々しい感受性に打たれました。彼女の生活と音楽との間には、壁も間仕切りもありませんでした。これが本物の音楽家かな、と思ったことが私の原体験とっていいかもしれません。劇場のコレペティータアのポジションというのは、あらゆる方向から愚痴がやってくる場所です。その中で、音楽のセラピストとしてやっていかなければなりません。全人間的に音楽を楽しめなければやれない仕事です。

本当に音楽が好き、という方が増えて欲しいし、そのためにこそ私の仕事もあると思います。

(この原稿は2月10日のインタビューをもとに書き起こしたもので、文責は編集部にあります)



▲2003年ベルヴェデーレ国際オペラコンクール(コレペティータ部門)の審査員を務めた会場

音楽の万華鏡 ⑦

歌曲『平家物語』

『平家物語』という、日本の中世を代表する文学作品であるという説明がよくなされます。しかし、『平家物語』は本来音楽作品として成立したと考えられます。琵琶伴奏付きの長編叙事歌曲といってもいいでしょう。この音楽種目のことを「平家」といいます。

平安時代の中ごろから、釈迦や高僧の生前の行いを、わかりやすく物語にして、旋律をつけて歌うことが行われていました。これを「講式(こうしき)」といいます。鎌倉時代には、講式を琵琶の伴奏で歌うこともあったようです。今日でも、天台宗と

真言宗にわずかですが残されています。今日では琵琶で伴奏されることはありませんが、その音楽の特徴は、平家とよく似ています。講式は儀式のおりなどに、僧侶によって歌われますが、平家は、琵琶法師が演奏します。源平の合戦で命を落とした武将たちの鎮魂と、仏教の布教のために、講式という宗教音楽の形を借りて、物語の筋をはめ込んだものと思われる。

現在は、『平家物語』のなかの8章段が、今井勉さんという大変声のよい盲人演奏家

によってかろうじて伝えられています。聴いていると旋律にもいろいろと工夫があってなんともいえない味わいがあります。

有名な冒頭の一句「祇園精舎の鐘の声」にも荘重なメロディがついています。《祇園精舎》は「小秘事」といって、簡単には弟子に

教えなかったので、今日伝承は絶えてしまいましたが、さいわい江戸時代に作られた楽譜があり、どのような旋律だったかがわかっています。五線譜では音価を正確に示しきれませんが、以下に少し紹介します。絶対音高は決まっていますが、これより1オクターヴあるいは、もう少し低く歌われたと思います。「鐘の声」の「え」を1オクターヴ下で繰り返す部分は、鐘の音の余韻を聴く思いがします。

薦田治子
(本学音楽学教授)

《祇園精舎》冒頭の旋律



卒業生インタビュー コンテストも楽しめれば

● 千田悦子 (ハーピスト) ●



千田悦子 Etsuko Chida

1978年生まれ。横浜市出身。学習院大学文学部哲学科卒業。2005年武蔵野音楽大学大学院修士課程修了。井上久美子氏に師事。マリ＝クレール・ジャメラに指導を受ける。第10回日本ハーブコンクール・アドヴァンス部門第1位、'00年チェコで開催の国際音楽祭ヤング・プラハに招聘されモーツァルト『フルートとハーブのための協奏曲』を演奏。第15回日本ハーブコンクール・プロフェッショナル部門第2位。'06年第16回イスラエル国際ハーブコンテスト第3位、最終選考ではイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団とハーブ協奏曲を共演。'07年銀座王子ホールで、今年1月に東京文化会館でリサイタルを開催。井上久美子ハーブトリオのメンバーとして各地で演奏活動を行うほか、NHK-FM名曲リサイタルなどに出演。

学習院大学の哲学科を卒業後、武蔵野音楽大学大学院へ。一般大学の学生に比べて、ひたむきに励む学生の姿勢に驚かされたという千田さん。イスラエル国際ハーブコンテスト第3位入賞への道のりを伺った。

イスラエル国際ハーブコンテストに出場したのは2006年の第16回大会。その何回か前の大会を聴衆の一人として現地で見ている。その時は、長丁場の大会に、緊張とストレスから出場者が次々と棄権したり失敗するようすを見て、自分にはこれに耐える強さは無いだろうな、と思っていた。



全くの偶然から ハーブの道へ

アイルリッシュ・ハーブを習うようになったのは8歳の時から。親戚の修道女さんが、弾かなくなったから、とくださったのがハーブとの出会い。楽しそう、でもどうやって弾くのかも解らず、習うにしても先生がいらっしゃるかどうか解らない。ところが偶然にも、住まいの近所に武蔵野出身のハーブの先生がいらした。ではちょっと習ってみようか、という程の軽い気持ち。

ピアノは2歳から習っていたので、音符は読めたから入りやすかった。そして、何よりも先生の所へ行くのが楽しかった。ピアノよりハ

ーブの方が楽しかった。

小学校5年生(11歳)の時、グランドハーブへ。タンスのような大きな物が我が家に運び込まれた時の衝撃は、今でも忘れられない。格闘技のように全身を使って弾く楽しさ、体全体で音楽をしているようだった。



大学までは 道を決めず

楽しくて続けていたハーブなので、高校も普通的女子校。色々な勉強に興味があったので、一つの道を決断しなければ、とは思えなかった。高校では美術の先生が講義をした芸術鑑賞の授業がとても面白く、美学的、哲学的に色々考えることの楽しさを教えていただいたと思う。そのことから、大学もやはり音大ではなく学習院の哲学科へ進むことになる。

高校生の時も少しずつ演奏会に出ていたし、大学時代もレッスンは続いていた。大学卒業にあたってレッスンをみていただいていた先生に、もっと



▲第16回イスラエル国際ハーブコンテストにて

じっくり習おうと思ったのが武蔵野の大学院に進んだきっかけ。その時は、ハープの道を選ぶ心が決まっていた。



練習は 人それぞれの ペースで

音大は普通大学と全く雰囲気が違う。皆、一つのことに向かっている。厳しい所へ来たな、とは思ったが違和感はない。ある時期、懸命に一つのことに集中することは必要だろう。ハープの場合は、40kgもある楽器を右肩でささえながら全身を使って弾く。体力を限界まで使い、指には大変な負担がかかる。

私も一時期ストイックなまで練習に打ち込んだ。その結果、腱鞘炎になり、痛い思いをしながら自分の練習ペースをつかんだ。連続で弾くのは1時間以内。時計を見ながらきちんと休む。楽器を抱えない完全な休みを取りながら、1日4~5時間の練習をしている。練習のインターバルは、体力にも集中力にも個人差があるので、自分で経験しながら自分のペースをつかむしかない。



イスラエルへ 向けて

コンテスト出場には前段階として書類選考がある。それに通るよう自分のプロフィールをまとめなくてはならない。しかしそれも、コンテスト出場のため、ということではなく、自分の勉強状態と合っているかどうか。私の場合はちょうどそれが合っていて出場できたと思う。

そして大事なものは、長いコンテストなので、そこで組まれるプログラムが、自分が長時間掛けて練習するのに向いているか、の判断。私の場合は先生に相談しながら考えていった。前に現地でコンテストを見た時は、とても無理と思っていたが、プログラムを

見た時はこれならやれるかな、と感じていた。これならコンテストに向けて勉強しても楽しいかな、自分の勉強のためにも受けてみようか、と思えるようになっていた。



2週間で 体重が 4kg減った

現地に入ってから大会期間は2週間と長い。

1. まず、くじ引きで順番決め。
2. 第1次、第2次はソロのプログラムでそれぞれ30~40分の演奏。
3. 第3次選考がセミファイナル。室内楽の演奏会形式のプログラム3曲で60分。
4. ファイナルがイスラエルオーケストラと協奏曲の共演。

体調だけは気をつけるつもりだったのに、水が合わず体調をくずす。お腹に力が入らず、ここまで来たからには悔いの残らないようにと気力だけで持たせた。

最後のステージが日本の朝のニュースで流れ、たまたま見た両親が、「これがウチの娘か」と仰天するほど痩せていた。持って行った衣装はブカブカで、後から紐で締め直したほど。やることはやった、とは考えていたが、ファイナルに残れるとも思わなかった。名前を呼ばれた時もしばし気づかず、周りから指摘されてやっと立ち上がったくらいだった。



もう一つの 興味を持つ

この大会には独特の雰囲気があり、誰もそれに飲み込まれる。そのため普段やったことも無いミスを犯したりする。分かれ道は、楽しめるかどうか



▲「ハープの未来2008にて」撮影：横田敦史

かだと思う。知らない土地に来て、場を楽しみ、出会う人を楽しむ。それには、日頃の好奇心、音楽以外の何かへの興味が大切だと思う。私はどちらかと言えば内向きの性格だが、性格そのものは人それぞれでいい。私は、その土地、その場を楽しむことができた。

ハーピストとしての私は、今まで寄り道をしてきたことで支えられているところもある。別の世界を持つことは大切だと思う。

大学院1年の時にアンサンブルで練習できる授業があるといい、と先生にお話ししたところ、大学はすぐに応えてくれ、次の年にはその授業が開設された。武蔵野の学風を感じる最高の思い出となった。一生懸命やっていれば可能性が開け、いろいろなことが実現できるのだ、ということ私は信じている。

(この原稿は1月28日のインタビューをもとに書き起こしたもので、文責は編集部にあります)



本学管弦楽団 ハンガリー演奏旅行へ



この度、武蔵野音楽大学とハンガリーのリスト音楽院が、日本・ハンガリー国交回復50周年と本学園創立80周年を記念して、管弦楽団の交歓演奏会を行います。

本学は、9月中旬、日本国内での演奏会

終了後ハンガリーを訪れ、ブダペストのリスト音楽院大ホールその他、パーチ、ジュール、デブレッツェン等で公演を行う予定です。一方、リスト音楽院は、11月に来日、東京をはじめ各地で演奏会を開催し、国際交流を深めることとなります。

本学園80年にわたる国際交流の歴史と実績に、華を添える意義あるプロジェクトとなるでしょう。

2001年3月、ブダペスト・リスト音楽院大ホールでの本学管弦楽団演奏会

第15回インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ



K. ガネフ



K. ゲキチ



I. イーティン



J. ヤンドー



A. ナセトキン



A. セメツキー



R. ダヴィドヴィッチ



M. ファウスト



M. ラリュー



松本 美和子



堀内 康雄

今年、第15回を迎える「武蔵野音楽大学インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ」が豪華教授陣を揃えて開催されます。

このサマースクールは、音楽の専門的な教育を受け、プロの音楽家や音楽教育に携わることを目指す人たちに、専攻実技を磨く絶好の場を提供するものです。(平成19・20年度「文化庁芸術団体人材育成支援事業」)

●開講期間・会場

平成21年7月19日(日)～29日(水)

武蔵野音楽大学・江古田キャンパス

●開設講座・講師

ピアノ＝K.ガネフ、K.ゲキチ、I.イーティン、J.ヤンドー、A.ナセトキン、A.セメツキー

ピアノ・デュオ＝K.ガネフ
ヴァイオリン／弦楽クワルテット＝
R.ダヴィドヴィッチ
フルート＝M.ファウスト、M.ラリュー
声楽＝松本 美和子、堀内 康雄

●募集人数・応募資格

1講座につき10～12名。弦楽クワルテットはグループで受け付けます。専門的教育を受けている方。国籍不問。ただし声楽は20歳から50歳まで。

●受講時間

ピアノ、ピアノ・デュオ、ヴァイオリン、弦楽クワルテット＝1回90分で3回。フルート、声楽＝1回60分で4回。(講師により当該時間を変動的に組替える場合があります)

●受講料

1人120,000円、ピアノ・デュオは1人70,000円、弦楽クワルテットは1人40,000円(レッスン料、通訳料、演奏会・講座入場料懇談会費等を含む)

●演奏会等

ピアノ、ヴァイオリン、声楽、フルートの講師によるリサイタル、講座

●お問い合わせ・要項請求

武蔵野音楽大学演奏部TEL.03-3992-1120へ募集要項をご請求下さい。(要項は無料、送料は大学が負担します)

*講師の病気、その他やむを得ない事情により、一部内容を変更する場合がありますので、予めご了承下さい。



サントリーホール「レインボウ21」本学企画を採択

サントリーホールが、エデュケーションプログラムの一環として実施している「レインボウ21」サントリーホール・デビューコンサート。大学生が自ら企画・制作を行う演奏会として、毎年首都圏の音楽大学から多くの企画案が出され、その中から3~4件の企画が採択されています。

武蔵野音楽大学は、すでに「没後120年フランツ・リストーその知られざる顔」と「近代ロシア新世紀への胎動〜

リムスキー=コルサコフから世紀末へ向かって」のテーマ、サントリーホールのアドバイスのもと、多くの学生が参画し充実した演奏会を開催してきました。

ひき続き2009年も、生誕200年のメンデルスゾーンをテーマとした企画を提出し、「コンセプトの明解さ、テーマの独創性」により、採択されることとなりました。

演奏会の詳細は、本誌14ページの演奏会のお知らせをご覧ください。

武蔵野音楽大学附属江古田音楽教室 第19回オペラ「ふしぎな魔法の笛」上演



武蔵野音楽大学附属江古田音楽教室のオペラ公演が、新春の1月11、12日の両日、ベートーヴェンホールにおいて開催されました。

子供によるオペラとして広く知られるこの公演は、キャスト、合唱はもちろん、オーケストラや練習ピアノなどの役割を、小学生から高校生までの生徒たちが担当するユニークな催しとして伝統を築き、これまで各方面から高い評価を得てきました。

19回目を迎えた今回は、「ふしぎな魔法の笛」(原曲：モーツァルト「魔笛」)を4回にわたり上演。本学の卒業生で我が国音楽界の重鎮大谷洵子女史の演出、本学講師前田淳氏の指揮と、子供の指導に経験豊かなスタッフのもと

で、生き生きと清新な舞台を創り上げた生徒たちの熱演は大きな感動を呼び起こし、満員の会場から出演者たちへ盛大な拍手と声援が送られました。子供たち一人ひとりにとって、オペラという総合芸術を通してモーツァルトの音楽の神髄に触れることができた、かけがえのない体験でした。



●表紙の顔

青山聖樹さん



東京生まれ。幼少よりドイツで育つ。名手インゴ・ゴリツキー氏のもとでオーボエを始める。東京藝術大学附属音楽高校卒業後、同大学に進み、在学中ドイツ・ハノーファー国立音楽大学に留学、シュトゥットガルト国立音楽大学同大学院卒業。

1993年、ドイツ・フィルハーモニア・フンガリカ、'02年、新日本フィル首席を経て、現在NHK交響楽団首席オーボエ奏者。また、武蔵野音楽大学准教授として後進の指導にあっています。

これまでゲスト首席として、ヨーロッパ各地の管弦楽団(ブダペスト祝祭管弦楽団、コンチェルト・バンベルク、ミュンヘン・パッサリステン、カンマーフィルハーモニア・アマデー、フィルハーモニア・オブ・ザ・ネーションズ等)に客演し、日本ではアンサンブルofトウキョウ及びカンマーアカデミーさいたまのソロ・オーボエ奏者として活躍する他、アンサンブル・アマデーを主催。またラインガウ、アフィニスなど数々の音楽祭に出演するなど活発な音楽活動を精力的に行っています。

一方、ソリストとして、KBS交響楽団、韓国交響楽団、北京交響楽団、ドイツ・フィルハーモニア・フンガリカ、新日本フィル、コーリアン・チェンバー・オーケストラ、大阪チェンバー・オーケストラ、アンサンブルofトウキョウ等と協演。

今後の予定として、NHK交響楽団の定期演奏会の他、アンサンブルofトウキョウ定期演奏会にコンチェルトや室内楽で出演予定。



栄冠おめでとう! (コンクール入賞者等)

(前号までの未掲載分、順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

- 三浦 麻葉(本大学院修士課程1年次在学ハープ専攻) 第4回 国際Vera Dulova ハープコンクール(ロシア) 審査員特別賞受賞
- 野尻 小矢佳(平成19年大学卒打楽器専攻) 第18回「朝日現代音楽賞」第8回 現代音楽演奏コンクール “競奏Ⅷ” 入選
- 初帆(大学2年次在学マリンバ専攻) 第14回 KOBE国際学生音楽コンクール 打楽器B部門 最優秀賞、兵庫県教育長賞、タカハシパール賞受賞
- 藤平 華子(平成20年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学音楽教育専攻) 第4回 東関東ピアノ・オーディションAブロック スペシャル部門 グランプリ、千葉県知事賞(大賞)受賞 ●小口 奈緒(大学2年次在学ピアノ専攻) チェコ音楽コンクール2008 ピアノ部門 第1位入賞 ●二井田 ひとみ(大学2年次在学トランペット専攻)第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 金管楽器部門 大学の部 第2位入賞(1位なし) ●嶋崎 雄斗(大学3年次在学マリンバ専攻) 第13回 JILA音楽コンクール 打楽器部門(マリンバ) 第2位入賞、第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 打楽器部門 大学の部 第3位入賞(1、2位なし) ●山口 茜(大学2年次在学ピアノ専攻 本高等学校卒) チェコ音楽コンクール2008 ピアノ部門 第3位入賞 ●矢澤 知嘉子(平成10年大学卒声楽専攻) 第4回 エルピス声楽コンクール アリア部門 第3位入賞 ●大熊 啓史(大学2年次在学テューバ専攻 本高等学校卒)第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 金管楽器部門 大学の部 第3位入賞(1位なし) ●金子 周平(大学4年次在学ピアノ専攻) 第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会ピアノ部門 大学の部 第5位入賞(1、2、3、4位なし) ●鈴木 梨紗(大学3年次在学ピアノ専攻)第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 ピアノ部門 大学の部 第5位入賞(1、2、3、4位なし) ●大和久 知里(大学4年次在学ピアノ専攻)第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 ピアノ部門 大学の部 入選 ●谷地 紗織(大学4年次在学ピアノ専攻) 第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 ピアノ部門 大学の部 入選 ●清水 綾子(大学3年次在学ピアノ専攻) 第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 ピアノ部門 大学の部 入選 ●吉田 恭子(大学3年次在学ピアノ専攻 本高等学校卒) 第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 ピアノ部門 大学の部 入選 ●青木 佑磨(大学1年次在学ピアノ専攻) 第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 ピアノ部門 大学の部 入選 ●石井 智恵(大学2年次在学フルート専攻)第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 木管楽器部門 大学の部 入選 ●水上 早苗(大学2年次在学オーボエ専攻) 第18回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 木管楽器部門 大学の部 入選 ●倉島 千枝(平成17年大学卒ピアノ専攻 本高等学校卒) 第18回 日本クラシック音楽コンクール 中部地区本選会 ピアノ部門 一般の部 好演賞受賞 ●杉浦 菜々子(本大学院修士課程2年次在学ピアノ専攻) 第2回 国際ピアノ伴奏コンクール 審査員特別賞(第5位)受賞 ●佐藤 香(大学4年次在学マリンバ専攻) 第22回 アジア国際文化芸術フェスティバル 新人賞受賞 ●工藤 聖彦(大学2年次在学マリンバ専攻) 第14回 KOBE国際学生音楽コンクール 打楽器B部門 奨励賞受賞 ●橋本 歌織(平成19年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学) 第12回 ベトロフピアノコンクール 大学生・一般部門 審査員特別賞受賞 ●三代 真帆(大学2年次在学ピアノ専攻) 第12回 ベトロフピアノコンクール 大学生・一般部門 奨励賞受賞 ●増田 幸奈(大学1年次在学ピアノ専攻) 第12回 ベトロフピアノコンクール 大学生・一般部門 奨励賞受賞 ●岡村 美沙(大学4年次在学ピアノ専攻) 日本シューマン協会設立35周年記念 ロベルト・シューマン音楽コンクール ピアノ部門 奨励賞受賞 ●川上 葉月(大学1年次在学フルート専攻) 第9回 ANPフランス音楽・コンクール 審査員賞受賞 ●安 弘子(大学3年次在学ピアノ専攻) 第9回 ANPフランス音楽・コンクール 入選、第2回 近・現代音楽コンクール(全日本演奏家協会) 入選 ●横山 美雪(平成7年大学卒ピアノ専攻 本特修科修了) 第5回 ブルクハルト国際音楽コンクール ピアノ部門 奨励賞受賞、第42回 東京国際芸術協会新人演奏会オーディション ピアノ部門 合格 ●堀部 祥子(平成19年大学卒ピアノ専攻) 第5回 ブルクハルト国際音楽コンクール ピアノ部門 入選 ●三雲 由佳(大学2年次在学クラリネット専攻) 第14回 宮日音楽コンクール 本選 管楽器部門 入選 ●伊藤 あずさ(大学4年次在学トロンボーン専攻) 第2回 日本トロンボーン学生音楽コンクール<ソロ部門> 本選 第1位入賞 ●中田 宜和(大学4年次在学トロンボーン専攻) 第2回 日本トロンボーン学生音楽コンクール<ソロ部門> 本選 奨励賞受賞 ●瀬戸 章子(平成7年大学卒ピアノ専攻 本高等学校卒 本特修科修了) 第41回 国際芸術連盟新人オーディション ピアノ部門 合格、奨励賞、審査員特別賞受賞 ●岡本 恵理(大学1年次在学ピアノ専攻) 第41回 国際芸術連盟新人オーディション ピアノ部門 合格、奨励賞、審査員特別賞受賞 ●読谷山 こそす(平成13年大学卒声楽専攻) 第41回 国際芸術連盟新人オーディション 声楽部門 合格、奨励賞、審査員特別賞受賞 ●荒川 知子(大学4年次在学ファゴット専攻) 第41回 国際芸術連盟新人オーディション 管楽器部門 合格、奨励賞受賞 ●内藤 麻奈美(平成10年大学卒ピアノ専攻) 第41回 国際芸術連盟新人オーディション ピアノ部門 合格 ●橋 典子(平成18年大学卒クラリネット専攻) 第41回 国際芸術連盟新人オーディション 管楽器部門 合格 ●江面 聡美(大学3年次在学トランペット専攻)／●山仲 啓右(大学3年次在学トランペット専攻)／●星 まなみ(大学3年次在学トロンボーン専攻)／●曾川 勝平(大学2年次在学テューバ専攻) 第42回 東京国際芸術協会新人演奏会オーディション 室内楽部門 合格 ●濱中 佑衣(大学2年次在学フルート専攻) フレッシュコンサート2009 in KANAZAWA 出演オーディション 合格 ●大久保 智(大学3年次在学ヴァイオリン専攻) 平成21年度春期海外音楽大学マスタークラス派遣助成オーディション 準合格 ●南 沙紀(附属多摩音楽教室在室 相模女子大学高等部3年生) 第10回 ショパン国際ピアノコンクール in ASIA 神奈川県地区大会 高校生部門 奨励賞受賞 ●小田原 和希(附属江古田音楽教室在室 所沢市立上新井小学校1年生) 日本ピアノ教育連盟 第25回 ピアノ・オーディション 関東地区J1部門 奨励賞受賞

平成21年度夏期講習会のお知らせ

平成21年度の武蔵野音楽大学、武蔵野音楽大学附属高等学校の夏期講習会(音楽大学受験講習会、高校音楽科受験講習会、社会人のための夏期研修講座、免許法認定講習)を、下記のとおり実施します。

講座名	会場	講座名	会場
大学受験講習会 ①7/28~7/31 ②8/2~8/5	人間キャンパス	社会人のための夏期研修講座 7/30~8/1	江古田キャンパス
高校音楽科受験講習会 7/28~7/30		免許法認定講習 7/25~8/5	

◎講習会要項は5月下旬発行の予定。要項の請求は、武蔵野音楽学園広報企画室(TEL.03-3992-1125)またはホームページ、携帯サイトにてお申し込み下さい(要項は無料、郵送料は学園が負担します)。

教員免許状更新講習のお知らせ

武蔵野音楽大学では、平成21年4月から実施される教員免許更新制において、文部科学大臣の認定を受けて免許状更新講習を下記のとおり実施いたします。

講座名	会場
教員免許状更新講習 ①必修領域(12時間)8/1~2 ②選択領域(18時間)8/3~5	江古田キャンパス

◎教員免許状更新講習の詳細については、本学ホームページをご覧いただくか、武蔵野音楽大学広報企画室(TEL.03-3992-1125)まで「平成21年度教員免許状更新講習のご案内」を請求して下さい(案内資料は無料、郵送料は学園が負担します)。

平成21年4月～7月 演奏会のお知らせ

武蔵野音楽大学大学院修士課程在生によるコンサート 4/22=オルガン、ピアノ 5/22=声楽、打楽器、弦楽器	4月22日 18:00	バッハザール(入間)	入場無料<全席自由・要入場整理券>
	5月22日 18:00	バッハザール(入間)	入場無料<全席自由・要入場整理券>
武蔵野音楽学園創立80周年記念 武蔵野音楽大学オペラ公演 W.A.モーツァルト:歌劇《コジ・ファン・トゥッテ》 指揮=北原幸男 演出=恵川智美	4月29日 15:00	ベートーヴェンホール(江古田)	A席¥3,000/B席¥2,500<全席指定>
	4月30日 18:30	ベートーヴェンホール(江古田)	A席¥3,000/B席¥2,500<全席指定>
	5月 2日 18:30	ベートーヴェンホール(江古田)	A席¥3,000/B席¥2,500<全席指定>
	5月 3日 15:00	ベートーヴェンホール(江古田)	A席¥3,000/B席¥2,500<全席指定>
ハーブの饗宴 出演:井上久美子、奥田恭子、千田悦子	5月 9日 16:00	シューベルトホール(多摩)	¥2,000<全席自由>
武蔵野音楽大学平成20年度音楽学部卒業生による新人演奏会	5月15日 18:30	津田ホール	¥2,000<全席自由>
レインボウ21 サントリーホールデビューコンサート2009 武蔵野音楽大学プロデュース メンデルスゾーンの「歴史音楽会」～ヘンデルとハイドンから受け継いだもの～ (主催:サントリーホール)	6月 2日 19:00	サントリーホール ブルーローズ(小ホール)	¥2,000<全席自由>
ルーサーカレッジ・コンサートバンド演奏会	6月 3日 18:00	バッハザール(入間)	入場無料<全席自由・要入場整理券>
武蔵野音楽大学平成20年度大学院修士課程修了生による研究演奏会	6月 9日 18:30	津田ホール	¥2,000<全席自由>
ジュリアード音楽院 ニュー・ジュリアード・アンサンブル	6月10日 18:30	モーツァルトホール(江古田)	¥1,000<全席自由>
クルト・グントナー・トリオ演奏会	6月23日 19:00	トッパンホール	¥3,000<全席自由>
武蔵野音楽大学ヴィルトゥオーソ学科演奏会 1	6月24日 18:00	バッハザール(入間)	入場無料<全席自由・要入場整理券>
2	6月25日 18:00	バッハザール(入間)	入場無料<全席自由・要入場整理券>
武蔵野音楽大学室内管弦楽団演奏会	7月10日 19:00	日本大学カザルスホール	¥2,000<全席自由>
武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会	7月15日 18:30	東京芸術劇場 大ホール	A席¥2,000/B席¥1,500<全席指定>
※その他の公演:7月5日 15:00 郡山市民文化センター/7月7日 19:00 りゅーとびあ(新潟市民芸術文化会館)			
武蔵野音楽大学インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ 世界の名教授たちによるスペシャル・コンサート			
堀内康雄 バリトン・リサイタル 共演:松本美和子	7月21日 19:00	練馬文化センター 小ホール	¥3,000<全席自由>
ロバート・ダヴィドヴィッチ(Vn.)&ケマル・ゲキチ(Pf.) デュオ・リサイタル	7月23日 19:00	練馬文化センター 小ホール	¥3,000<全席自由>
マクサンス・ラリュー フルード講座	7月27日 18:00	モーツァルトホール(江古田)	¥1,000<全席自由>

お問い合わせ ●武蔵野音楽大学江古田キャンパス演奏部 TEL.03-3992-1120 ●武蔵野音楽大学入間キャンパス演奏部 TEL.04-2932-3108
※講師の病気、その他やむを得ない事情により、内容を変更する場合がありますので、あらかじめご了承下さい。

平成21年度武蔵野音楽大学 武蔵野音楽大学附属高等学校学校説明会

本学では、音楽大学・高等学校音楽科に進学を希望している高校生、中学生、小学生とその指導者、保護者の方々を対象にした、武蔵野音楽大学・同附属高等学校の説明会を、各地で開催しています。平成21年度は下記のとおり開催いたしますので、ぜひご参加下さい。

日程	会場	申込締切
● 5月24日	千葉市「青葉の森公園芸術文化ホール」	5月 7日
● 5月24日	甲府市「甲府市総合市民会館」	5月 7日
● 5月31日	松山市「(株)ヤマハミュージック瀬戸内松山店 5Fアオノホール」	5月14日
● 5月31日	横浜市「横浜市栄区民文化センター リリス」	5月14日
● 6月 7日	大分市「iichiko 総合文化センター」	5月21日
● 6月 7日	桐生市「桐生市市民文化会館」	5月21日
● 6月14日	「武蔵野音楽大学 江古田キャンパス」 ※大学のみ説明会となります	5月28日
● 6月21日	宇都宮市「栃木県総合文化センター」	6月 4日
● 6月28日	「武蔵野音楽大学 入間キャンパス」	6月11日
● 11月15日	「武蔵野音楽大学 入間キャンパス」	10月29日

お申し込み・お問い合わせ 武蔵野音楽学園広報企画室 TEL.03-3992-1125
学園のホームページ、携帯サイトからも申し込みができます。

●説明会の内容●

- 10:00～16:00(予定)
- 全体説明会(大学・高等学校別に行います)
- ミニ・コンサート
- 受験相談(希望者のみ)
- ワンポイント・レッスン(希望者のみ)
- 参加無料(簡単な昼食を用意します)

編集後記

往く人、来る人が交差する学園の春。巻頭の畑中先生は音楽学校受験のときの嘲笑の聲が、生涯の音楽人生を支えてくれたそうです。また卒業生インタビューの千田さんは、一般大学への回り道がハーピストとしての支えになっている、とおっしゃいます。海外音楽事情には初の日本人が登場。その三ッ石先生も、学んでいるうちに適性が定まった、とおっしゃいます。ゆっくり着実に歩みましょう(編)。

着任外国人教授紹介

(平成21年度前期)

レイ・E・クレマー (ウィンドアンサンブル指揮 / アメリカ)
Ray E. Cramer

アメリカで最も優れた音楽学部として評価されているインディアナ大学で、2005年まで吹奏楽学科主任教授並びにバンドディレクターとして活躍し、現在、世界的に権威のあるミッドウェスト・クリニク会長の要職にある。

これまでも全米吹奏楽指導者協会会長をはじめ数多くの吹奏楽協会の要職を歴任している他、インディアナ大学最優秀教授賞、Phi Beta Mu 国際優秀賞等多くの賞を受賞。各国で客員指揮者、指導者、審査員として活躍している。



オフィクレイド

ゴトゥロー作 パリ 19世紀中期 全長111cm



ベルリオーズ作曲「幻想交響曲」の第5楽章では、グレゴリオ聖歌から採用された有名な「怒りの日」のテーマが、重々しく鳴り響く。このテーマは現在チューバが担当するが、初演当初はオフィクレイドが使用された。

オフィクレイドは、1817年にパリの楽器製作家アラリが考案した、キイ・システムを持つ金管楽器で、名称はギリシア語の「キイの付いたセルパン(蛇)」を意味する。アルトからコントラバスまでの各種が作られたが、特にバスが普及し、軍楽隊や吹奏楽、オーケストラで使われた。スポンティーニのオペラ「オリンピア」(1819年)に初めて登場し、メンデルスゾーンやヴァーグナーもこの楽器のために重要なパートを書いている。

19世紀前半、オーケストラの金管楽器群にも豊かな低音が求められると、以前から軍楽隊で使われていたS字型の楽器セルパンや、その縦型のアップライトセルパン、さらに新しく考案されたオフィクレイドなどがその役を担った。しかしヴァルヴ・システムを採用したチューバが発明されると、豊かな音量と優れた表現力でそれらの楽器を駆逐し、19世紀後半にチューバはオーケストラに定着した。このチューバの台頭にオフィクレイドは姿を消した。

チューバは、オフィクレイドに比べはるかに大きな音量を誇る。現在、オフィクレイドのために書かれたパートはチューバで演奏されるが、その際に奏者は他の楽器とのバランスに配慮をしている。「怒りの日」のテーマにはファゴットが加わっているが、このファゴットの音をいかに隠さずに演奏するかが、オーケストラのチューバ奏者にとって腕の見せ所である。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

❖ 目次 ❖

創立80周年を迎えて 福井直敬	①
私を支え続ける嘲笑の声 畑中良輔	②
音楽余話 大演奏家も「あがる」!? コンスタンティン・ガネフ	⑤
海外音楽事情 音楽の何でも屋、コレペティートア ミツ石潤司	⑥
音楽の万華鏡 歌曲「平家物語」 薦田治子	⑧
卒業生インタビュー コンテストも楽しめれば 千田悦子	⑨
MUSASHINO NEWS	⑪
❖ 本学管弦楽団 ハンガリー演奏旅行へ	
❖ 第15回インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ	
❖ サントリーホール「レインボウ21」本学企画を採択	
❖ 武蔵野音楽大学附属江古田音楽教室 第19回オペラ「ふしぎな魔法の笛」上演	
❖ 栄冠おめでとう! (コンクール入賞者等)	
❖ 平成21年度夏期講習会のお知らせ	
❖ 教員免許状更新講習のお知らせ	
❖ 平成21年4月~7月 演奏会のお知らせ	
❖ 平成21年度武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 学校説明会	
❖ 着任外国人教授紹介	

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖ 発行 ❖



創立八十周年

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1

TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728

TEL.04-2932-2111 (代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1

TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2009年4月1日発行 通巻第89号



携帯サイト
<http://musashino.jp/>